

大人の責務とは
～我々は、世代として社会に対して何をすべきか～

平成21年8月
代表幹事 片岡宏一郎

1. 問題意識

「あなたは大人ですか？」と聞かれたら、皆さん、何と答えるだろうか。「何でそんなことを聞くのか？」と訝りつつ、皆、「そうだ」と答えるはずである。

我々浩志会研究会員のメンバーは、概ね30代後半から40代半ばで構成されている。立派な「大人」である。生物学的に、我々が大人であることは疑うべくもない。

精神的にはどうか。学生時代は親や先生が、就職してからは上司や先輩が、いろいろな指導をしてくれた。叱られることも多かった。だが、徐々に面と向かって叱られたり、注意されたりすることは少なくなっている。自分で考え、判断することが求められる年代に入ったということであろう。

部下をはじめ、下の世代と接すると、「ゆとり世代」として育ったからか、「打てば響く」という感覚が少なく、もどかしさを感じる。上の世代を見ると、もはや「逃げ切り」を図っているのか、諦めなのか、現状維持的な判断に傾きがちに見え、どこことなく違和感を覚える。

恐らく、我々の上の世代も、我々と同じような年代のころ感じたであろう。我々がやらなければ、誰がやるのか。「大人」とは、今の社会の「中核」を構成する世代と言えるのではないか。

では、「責務」とは何であろうか。

職場においては、何人かの部下を束ね、一定規模の組織を率いている方も多いただろう。就職してすぐの時のように、自分勝手に上司や組織の方針を批判できる立場ではなく、むしろ、組織を運営する責任の一端を担っている立場である。また、家庭においては、家族を養い、子供を育て、場合によっては親の面倒も見る、というように、家庭の中で頼られる存在であることも多いと思われる。

我々は、こうした職場や家庭での自らの役割を自覚し、毎日懸命にその役割を果たし、改善の努力を行っている。このことは非常に大事なことであり、それがきちんとできているということは立派なことである。

しかし、それだけで十分であろうか。

我々の世代は、成長していく過程において、「明日は今日よりも良い日になる」というような明るい未来についての確信を持つことができた。もちろん、個々に見れば、世界のどこかで戦争が起こり、国内でも犯罪があり、病気になる人もいれば、親や親族の会社が倒産し経済的に困窮する、といったことはあっただろう。

しかしながら、社会全体の空気として、「生活が豊かになる」という経済面だけでなく、科学技術の進展にせよ、新しい文化にせよ、社会が良くなっていくという実感があつた。

これは、我々の両親や祖父母の世代が懸命に働き、我々に与えてくれたものである。彼らが、敗戦によりほとんどすべてを失ったところから立ち上がり、こうしたところにまで到達したことは、今更ながら賛嘆の念を禁じえない。

一方、我々は、こうした「明るい未来についての確信」を、次の世代に持たせることができているであろうか。

数年前のことである。私は長男の通う保育園の音楽会で、子供たちがたどたどしいながらも一生懸命に楽器を演奏する姿を見て、涙が出て仕方がなく、大変困った記憶がある。この子供たち（3歳くらいであったろうか）は、まだ、家族の保護の下で安心して暮らしており、自分たちの将来について考えたり、社会で起こっている出来事に何かを感じたりすることはない。しかし、何年か経ち、この子供たちが社会でのさまざまな出来事に触れ、自分たちの将来について考えるようになったとき、何を思うだろうか。

我々が次の世代に不安や不満しか感じさせられていないとしたら、我々の世代は、「大人」として、責務を果たしているといえるだろうか。

もうひとつ気になることがある。社会全体が、あまりに「内向き」になっていないか。自らの反省も含め、我々は今の時代の中核を形成する世代として、どれだけ社会とのかわりを持っているだろうか。

例えば、次の世代を育てるという事業は、「大人」としての重要な責務だと思われるが、子供のいる方、いない方にかかわらず、教育は学校任せになっていないだろうか。「円周率 $\pi=3$ 」を批判はするものの、何かアクションを起こしているだろうか。単に、学校がダメだったら塾に行かせればよい、になっていないだろうか。あるいは、職場においても、部下に仕事を任せているだろうか。「自分でやってしまった方が早い」と仕事を抱え込んでいるのに、「いつまでも新人の時と同じ仕事をやっている」などと自嘲していないだろうか。次の世代を育てることは、とても大きな労力のかかる仕事である。だからといってこれを他人任せにしていないだろうか。

地域社会への関わりはどうだろう。かつては、誰もが地域の一員としてそれぞれ何らかの役割があつた。それぞれが自分の役割を果たすことは、安心して楽しく暮らせるた

めの条件であったと言ってもよいかもしれない。しかしながら、地域とのつながりが薄れ、隣近所さえもどういう人が暮らしているか分からなくなってきたり、自分自身あるいは自分の家族がよければそれでよい、という風潮に覆われているように見える。自分の住む地域の行政にさえ、どれだけ関心を払っているだろうか。国政選挙には参加しても、自治体の首長や地方議会議員の選挙で投票するといった最低限の義務さえ、どれだけ果たしているだろうか。

また、外に目を向ければ、日本の外で起こっていることに、どれだけ関心を持っているか。日本という国を世界で尊敬される立派な国にしたい、という思いが薄れてはいないだろうか。「世界第二位の経済大国」という呼称が風前の灯となっている今、日本は国際社会においてどのような地位を占めようとしているのか。「経済協力などやめてしまえ」的な内向き思考は何をもたらすだろうか。海外旅行に出かける学生が減っているという話も気にかかる。日本は、地政学的にも、経済的にも外国との関わりなしには生きていけない国であり、世界で起こっている出来事は、必ず何らかの形で国内の社会・経済に跳ね返ってくるはずである。

人類は、その誕生から約500万年、脈々と世代交代の営みを繰り返してきた。恐らく、そのほとんど大部分の人々は、生きることに精一杯だったはずである。自分や家族、あるいは、自分の所属する組織がよければそれでよい、ということだったと思う。しかしながら、まがりなりにも、人類とその社会が今日に至るまで発展してきたのは、その世代ごとに、「この社会をもっと良くしたい」という思いを持った人々がいたからではないか。

繰り返しになるが、我々は、現在の社会の中核を構成する世代である。先日、採用面接に訪れた学生が、「高等教育を受けられたのは親のおかげだけでなく社会のおかげであり、高等教育を受けた者は、官であれ民であれ、公のために働くべきだと自分は考えている」と話すのを聞いて、若い世代にもこういう考え方をする者がいることを知りうれしく思った。他方で、ある大企業の幹部の方と話していて、その方が、「子供はシンガポールの高校に通わせており、大学はアメリカに行かせ、アメリカで高い給料の得られる仕事につかせたい」と話すのを聞いて、さびしい思いを感じたこともある。

浩志会のメンバーは、今の社会にとって重要な役割を担っている企業、官庁から選出されてここに集まっている。「この社会をもっと良くしたい」という思いを根底において共有している「同志」とであると確信している。上滑ったエリート意識ではなく、社会において重要な役割を担うことを期待されているということを改めて思い返したい。

2. 検討課題

以上のような問題意識から、今年度の浩志会研究会のテーマを「大人の責務」としたい。個々人としての「大人の責務」も大事な問題ではあるが、縷々これまで述べたように、社会を担う中核の世代として、この社会に対して何をすべきか、という意味での「大人の責務」を考えたい。

昨年の研究会においては、「日本の個性」という大きなテーマを扱った。世にはびこる「二分論」から脱却し、新しい価値を生み出す「新結合」が「日本の個性」となりうるのではないかと仮説の下、普段あまり突き詰めて考えることのない「日本の個性」とは何かについて、1年間悪戦苦闘しつつ議論を行った。抽象度が高く、非常にタフなテーマであったため、自分自身の反省も込めて考えると、議論に精一杯で、「次のアクションにつなげる」という点を十分議論する余裕がなかったように思われる。

浩志会が、「官民の研修・交流を通じて日本の将来を担う人材の育成」を目的に設立されていることを考えるとき、今年度の研究会においては、一年間の議論・検討の結果として、我々自身の行動が少しでも変わるようなものに取り組んでみたい、という思いがある。

「自分のことさえきちんとしていれば、あとは誰かが考えてくれ、やってくれる。その結果、社会は良くなる」という考えが幻想であることは、我々自身が感じてきたことではないだろうか。今、我々自身が少しでも行動を起こすことで、社会を変えていくことが求められているのではないか。

今年度においても、過去2年間と同様、フォーラムごとのサブテーマは設定しない。各フォーラムにおいて、それぞれ掘り下げて自由に議論・検討していただきたい。

議論の順序としては、まずは、各メンバーが、現在の社会について、「何かおかしい」、「これが足りない」というような論点を提示し、チャレンジすべき問題点についての共通認識を得ることから始めていただければどうかと思う。なるべく、メンバーの経験やおかれた状況に応じた「実感のあるもの」を議論していただくのがよいのではないか。強固な「思い」があるほど、最終的な「行動」につながっていきやすいと思われる。メンバーひとりひとりが異なる論点を提示するだろうし、漠然とした問題意識を具体的なものに固めていくには大きな労力がかかるが、昨年の経験でも、共通認識が曖昧なまま進んでいくと、議論が行ったり来たりになってしまい、なかなか進まないことになってしまうおそれがある。夜の懇親会の場のほうが盛り上がりやすい論点であるが、それもメンバーがお互いをよりよく知る手がかりになってよいかもしれない。

次に、単にこれだけで終わってしまえば、不平家の独り言か、サラリーマンの飲み屋の愚痴のようなものにしかならない。「行動」につなげるためには、その問題がどうして起こっているのかの原因について深く探っていただきたい。安易に答えを見つけてしまおうとせず、過去はどうだったのか、また、外国の社会ではどうなのか、といったような広い視野と複合的な視点を持ちつつ、議論・検討することが大事だと考えられる。この過程で、外部の有識者の話を聞くことも有意義であろう。

その上で、最後に、我々が「世代」として、どういう責務を担い、どのように行動していくかについて検討していただきたい。「文字」として美しくまとめることが目的ではない。議論が「腹に落ちる」結果として、自ずとアクションにつながっていくのがベストである。このフェーズでは、実際に既にアクションを起こしている方々の話を聞くことも考えられる。また、時間が許せば、フィールドワークをやってみる、といったことも一案かもしれない。

既に述べたように、どのような「大人の責務」を取り上げるかは、各フォーラムの自由に委ねられているが、漠然とした広いテーマであるため、いくつかの検討課題になりそうな例を示したい。私自身答えを持ち合わせているわけでもないし、もちろん、これらの例にとられる必要はなく、各フォーラムでの議論のきっかけにでもなれば幸い、という程度のものである。

・規範を作ること

最近、社会の「規範」が薄れているのではないか。かつては、どういうことをすることが良いことで、どういうことをすることが悪いことか、という社会的規範が存在した。それは、法律のような厳密なものではなく、社会を構成する人々の「共通認識」といった緩やかなものである（個々の単位では、「家訓」や「社訓」も規範に含まれるだろう）。現在、ちょっとした住民間のトラブルや場合によっては家庭内の問題も警察等を巻き込んだ法律問題になることが多い。こうしたものを見ると、社会としての「自治能力」のようなものが薄れている気がしてならないが、この背景には、社会的な規範の希薄化が影響しているのではないだろうか。

規範の背後には、共通の価値観の存在が不可欠であると思われる。価値観自体が多様化している現在、なんでもかんでも法律で縛るのではなく、社会として規範を持つことは難しいのだろうか。

・次の世代を育てること

「学級崩壊」、「モンスター・ペアレント」、「学力低下」など、学校教育を巡る様々な問題が世の中に喧伝されている。これまで、教育の問題を「学校まかせ」にしすぎてこなかっただろうか。家庭や地域、あるいは社会の一員としての企業が教育に

対してできることがもっとあるのではないだろうか。また、「ニート・フリーターの増加」、「少子化」など、社会全体で取り組む必要のある問題も顕在化している。さらには、職場においては、「ゆとり世代」の若者をどのように鍛えていくか、という課題もある。

我々は、どのような次世代を作りたいのか。そもそも、それが曖昧なのではないだろうか。この場合、「子供は親の鏡」と言われるように、我々自身がどうあるべきか、という論点も避けては通れないだろう。

・健全な社会の「目」を持つこと

情報技術の発展により、我々はより多くの情報をより迅速に得られるようになった。しかしながら、その分だけ、二次的な情報に接することが多くなるとともに、また、あまりに多くの情報に接するため、判断なしに情報を受け入れることが多くなっているとも言えるのではないか。

例えば、マスコミに関して、自分の所属する組織に関する報道など、我々は、批判的な目を持って接し、何が正しく何が正しくないかを自ら判断することができる。他方、自らと直接的な関わりのない案件については、マスコミの報道をそのまま鵜呑みにしていることが多いのではないだろうか。

「マスコミのレベルが低い」、「マスコミは国民が求めるものに合わせているだけ」といった無責任な批判の応酬は建設的な議論ではない。健全な社会の「目」を持つことは社会にとって重要な課題である。そのために我々は何ができるだろうか。インターネットをはじめとする情報技術の発展は、どのような影響をもたらすだろうか。

これらの課題例のほか、将来の社会のあるべき姿についてのビジョンを示すこと、経済的な豊かさを保障すること、社会の安全を確保することなど、様々な責務が思い浮かぶ。こうした大きな命題をさらにブレイクダウンして議論を進めることも一案であろう。各フォーラムの創意工夫を期待したい。

3. 留意点など

もとより正解がひとつに定まるようなテーマではない。だからこそ、議論のプロセスを大事にしていだきたい。日ごろ我々は、仕事の中で、アウトプット（結論）のイメージを持ちつつ、そこから逆算してロジックを固め、作業を行うというスタイルを基本としている。報酬をもらい、成果が求められる「仕事」である以上、それは合理的で効率的な手法である。しかしながら、浩志会の活動は仕事ではない。むしろ、答えを出すことを焦らず、正解のないテーマと悪戦苦闘していただきたい。試行錯誤の議論を繰り返す経験は貴重なものとなるであろう。そうした中で、生涯の友人が得られることも期待したい。

また、繰り返しになるが、今回のテーマの設定にあたっては、「行動につながる」という点に意識を置いた。これは、浩志会の設立趣旨である「人材育成」に立ち返ったものである。同世代の問題意識を持った人間が、それぞれの所属する組織の利害を超え、議論を闘わせることのできる浩志会は、何事にも代えがたい人材育成の「場」と言える。これをさらに一歩進めて、ここに参加した各メンバーの行動が、この1年間のプロセスを経て、少しでも変わるとしたら、とても大きなことである。

「わずか百数十人の行動が変わっても、社会が変わるほどのものではない」とシニカルに切り捨てることは簡単である。しかし、社会において重要な役割を担っている企業、官庁から選出され、かつ、社会の中核を担うべき世代である我々が変わることを意味は大きいと信じ、足掻いてみたい。ミスチルの歌の歌詞にこういうフレーズがあった：「暗闇で振り回す両手も、やがて上昇気流を生むんだ」（『one two three』）。

この1年間の浩志会研究会の活動が、我々にとって忘れられない良い経験になることを期待しています。楽しく、がんばって、一緒にやってみましょう。よろしく願いいたします。

以 上

（本稿における意見に関わる部分は、筆者の個人的見解であり、浩志会及び筆者の所属する組織とは無関係であることをお断りいたします。）